

川づくりと地域連携-遠賀川直方での取組みを事例に

九州大学大学院 准教授 樋口 明彦

1. はじめに

現在日本の大小の河川で、いわゆる多自然川づくりをはじめとした様々な川づくりの取組みが進められている。それらのいくつかでは、地域に暮らす人々が主体的に参加することによって川との係わり合いの歴史や生活に根ざした経験と知恵が持ち寄せられ、治水利水を越えた地域に愛される川づくりがたちになりつつある。そんな川のひとつが遠賀川である。

本稿では、遠賀川で地域の人々と河川管理者・地域行政そして大学がチームを組んで進めてきた川づくりの取組みを紹介しながら、川づくりと地域連携について筆者の思うところをいくつか述べてみたい。



図-1 遠賀川とその周辺

2. これまでの取組みのあらまし

①直方川づくり交流会の設立

遠賀川における川づくりの取組みは、直方川づくり交流会が誕生したことから始まる。筆者はこの段

階ではまだ参加していない。交流会会長の野見山ミチ子さんの著作²⁾から引用させていただき、当時の雰囲気を見てみよう。

「直方川づくり交流会は1996年に女性11名、男性11名で発足いたしました。(中略) 同じ川づくりに参加をし、お互いが意見を言い合って、そして今年で12年、(中略)『遠賀川夢プラン』をこれまで3回提案いたしました(1999年に第一次案、2000年に第二次案、2001年に第三次案)。これは国と県と市に対して、一堂に集まっていたら、私たちが絵にかいたことを、メンバーそれぞれが熱い思いで提案をし、皆様に訴えるという形式をとってきました」。市民有志が集い、月一回の例会を重ねること120回以上、息の長い取組みの中で、川づくりに向けた行政への提案だけでなく、子供たちを対象とした学習活動を中心に様々な市民活動を遠賀川の川辺で展開してこられている。

②水辺館の完成

活動を始めて8年が経った2004年、直方市指定の緊急避難所、水防団待機所などの地域の防災拠点として、さらに環境学習など多様な地域活動の拠点としての役割を持った「遠賀川水辺館」が彦山川と遠賀川の合流点に会館した。川づくりの拠点を作ろうという交流会の働きかけがベースとなっており、施設の運営は直方市より委託を受けた「NPO法人直川づくりの会」によって行なわれ、野見山さんがゼネラルマネージャーだ。この施設の完成は、市民による川づくりの取組みに大きな足がかりを提供することとなった。現在カヌースクール、稲作体験、野鳥観察などの定期的な開催、水生生物調査、水質調査、小中学校の総合学習との連携等、実に多様な活動が展開されている。夏休みには水辺館に子供たちが泊り込んでのサマースクールも開校される。YNHC(青少年博物学会)という地元中高生のグループ活動もあり、一昨年はメキシコで開催された「世界水フォーラム」に参加してきたそうだ。詳細をお知りになりたい方はwww.mizubekan.jpにアクセスされたい。



写真－1 水辺館

③高水敷の緩傾斜スロープ化

2005年、国土交通省遠賀川河川事務所、交流会メンバーを含む地域市民、直方市役所の都市計画課、そして筆者等により構成された「遠賀川を利活用して直方を元気にする協議会（以下協議会と略す）」が発足し、市民の意見を取り入れた河川改修計画の作成作業が進められることになった。筆者の研究室が参加するようになったのは、この段階からになる。

改修前は、都市河川でよく見られる低水路と平らな高水敷を組み合わせた複断面開水路であったが、議論の結果、水辺に安全に近づくことができ、広い範囲で自由に利用できる河川空間の実現を目指そうということになった。こうしたコンセプトを実現するため低水路コンクリートブロック護岸を撤去し、高水敷を緩傾斜スロープ化して水面までなだらかにつなげるという断面が採用されることになり、平成18年に実施された延長約600mの左岸改修工事以降数次の改修事業が実施され、直方地先の遠賀川河川空間は大きく変貌を遂げた。完成後半年ほど経過した段階で筆者らが行なった現地調査の結果によれば、改修後に河川敷の利用者が約50%増加し、以前は見られなかった多様な利用の形態も確認されている。



写真－2 改修前の遠賀川



写真－3 改修後の遠賀川

改修前の河川断面構造は複断面開水路であった。高水敷は平坦であり、低水護岸の際まで近寄らないと水面を視認することはできなかった。また、コンクリートブロック積みの低水護岸は1.5割勾配で造られており、安全に水面まで降りることは困難であった。コンクリートブロック積みの低水護岸を撤去し、高水護岸中段からなだらかに水面までつなげる緩傾斜のスロープを基本の断面として採用し、川の流れに逆らわない範囲でアンジュレーションを施した。これにより河川敷のどこからでも水面が見通せるようになり、安全に水に近づくことが可能となった。

3. 継続的な河川行政と市民の二人三脚

12年という時間の中で、遠賀川での取組みは着実に成果を挙げつつあるが、ここではその背景として地域市民と河川管理行政とのつきあい方を見てみる。

交流会の野見山さんは先に触れた著書の中で次のようにも語っている。「遠賀川河川事務所の直方出張所に、田上（たのうえ）さんという所長さんがおいでになりました。（中略）この田上所長と出会って、みんなで川のことを考えてみようよ、関さんの書かれた多自然型川づくりのこと³⁾を、少しお勉強してみようよ（中略）ということから『直方川づくり交流会』が発足いたしました」。地域市民と河川管理者との連携がこうしたかたちからスタートしていることが遠賀川の特徴だろう。市民の側に川への思いを持った人々がいて、行政の側にもそうした思いに共鳴できる人がいた、ということだ。そしてお互いの思いをざっくばらんに言いあえるこの関係は、行政側の担当者の異動が数度行なわれた現在も継続している。野見山さん達市民の側が熱心なことは先にも触れたが、遠賀川河川事務所の側も異動の度に田上さんのような人がやってくる。文字通り多士済々なには途中から参加させていただいた筆者も何度も驚

かされた。野心的な河川敷改修事業についての合意形成がスムーズに進んだのも、長年のつきあいを経て両者の信頼関係がメンバー個々のレベルでしっかりと構築されておりビジョンが共有されていたからできたことと言えるだろう。

「この川づくりは10年の時間がかかっています。始まりは1996年、地域住民が川づくりの勉強を始め、河川事務所とも議論を戦わせながら、次世代のために『ふるさとの地域や川がこんなだったらいいな』という『夢』を描きました。そして今、行政の協力や学者の知恵を得て、『夢』が形になろうとしています」（「ふるさと散歩道遠賀川編、西日本新聞2007年8月4日」から抜粋）。これは、当事遠賀川河川事務所長だった松木洋忠さんの書かれた文章である。「学者の知恵」と書いてくださっているが、川づくりの現場で筆者らのやれることは僅かなものであり、野見山さんたちのような地域市民の強烈なエネルギーと河川行政側のこうした謙虚で暖かな姿勢があることが、川づくりにはとても重要なことなのだろうと思う（これを「連携」とよぶのは少々あじけない）。

4. みんなで粘土をいじって考える

ここでは、遠賀川の取組みに参加させていただくなかで筆者らがみつけた川づくりの議論を支援するちょっとした手法についてお話したい。

地域市民の川づくりの思いが具体的な姿として河川管理者に伝わるためには、それをかたちにする必要がある。一方、河川管理者が作成する河川の図面は一般市民にはわかり難い。筆者ら大学は、二つの主体のあいだでコミュニケーションのための橋渡しをさせていただいた。そこでとても役に立ったのが粘土である。ほとんどの人が幼年期にいじって遊んだことのあるあの粘土だ。彫刻用の扱いやすい粘土でできた500分の1や200分の1の川の現況模型を準備し、それらを好きなようにいじっていただく機会を協議会の中に設けた。はじめは遠慮がちであったが、やがてほとんどの参加者が模型の作り直しに参加するようになり、平らな高水敷と勾配の急なコンクリートブロック護岸は彼らの思いを反映した緩やかな勾配のスロープに置き換えられていった。間違えても粘土ならすぐにやり直せるし、違う考え

方があればそれぞれの模型を作って皆の前で比べてみることもできる。少々スケールがおかしかったり形がいびつであったりしても構わない。頭の中にある将来の川のイメージを立体的にかたちにし共有するという面では、この粘土模型は抜群の威力を発揮する。それまで河川管理者の側から図面を見せられながら「これはかくかくしかじかで」と説明されてもピンときにくかった市民の皆さんも、粘土模型を使って説明してもらえば「なるほど、そうになっているわけか」と簡単に腑に落ちる。厚紙や発泡スチロールなどいろいろな材料を試してみたが、粘土が一番よいようだ。

こうしてできあがった粘土のかたまりを筆者らの研究室に持ち帰り、参加者が模型に盛り込んだ思いや提案を少々きれいにしてあげる（リアルにする）と、次の集まりではさらに踏み込んだ議論が可能となる。現在完成している遠賀川の河川敷の姿は、こうした作業の積み重ねを経て図面がひかれ工事がおこなわれたものである。

河川敷のどこからでも水面が見通せる親水性の高い空間を創出すること、川本来の自然な表情に近づけることなどは、市民による粘土いじりの段階で十分な合意が形成された方針であり、子供がサッカーをして遊べる3%未満の勾配から草スキーのできる25%程度の勾配までさまざまな空間を設けること、数箇所の丘を設けてうねるような地形を造成し視覚的な空間の分節化を行なうことなどは、参加者の意見を筆者らが模型の上に落としこみ参加者全員によって確認され了解された項目である。

現在、この粘土模型の手法に少し手を加えて改良したものを筑後川に持ち込み、その有効性についての検証を行なっている。結果については別の機会にご報告したい。筑後川でやってみるきっかけになったのは、以前遠賀川で一緒に仕事をさせていただいた遠賀川河川事務所の牟田さんという方が筑後川河川事務所へ移動され、その際に遠賀川で試みた手法を移動先の筑後川に持ち込んでくれたからだ。当の牟田さんはまた別の職場に移動されたが、引き続き担当されている阿部さんは、「このやり方を普及させることで、職員と地元の人々とのコミュニケーションがスムーズになり、少しでも地域に愛される川づ

くりができるようにしたいものです」と言ってくださっている。これも先に触れた継続性のひとつの成果と言えるかもしれない。



写真-4 市民による粘土いじり①



写真-5 市民による粘土いじり②

粘土いじりは年をとっても楽しいものだ。大きな模型を大勢で囲みながら粘土いじりをするうちに、いつのまにか将来の川の姿がかたちとなって現れてくる。

5. 川づくりをまちづくりに展開していく

本稿の本題は川づくりと地域連携であるので、最後に川づくりをもう少し広義のまちづくりに展開することの可能性について書いてみたい。

協議会では、「川というすばらしいパブリックスペースを地域の中に取り込み、活かしていこう」という議論を集まりの冒頭から続けてきている。しかしこれまでは、まちと川を一体的に考えようといっても、リアルな議論にはならなかった。つい最近まで意識の中の川辺はそれほど身近なものではなかったわけだから、急に何か考えろといわれても市民の皆さんにとってそれは難しい。さすがの河川事務所も、いざ陸に上がってまちのことを考えろとなるとなかなかよい知恵は浮かんでこない。仕事の領分を越えているのだから無理もないことだ。

しかし、水辺館ができあがったことで地域の市民活動が活性化し河川空間の整備も進む中で、徐々に

ではあるが川とまちとをつなぐ取組みがはじまりつつある。今年には河川敷空間を生かした市民イベントが協議会の手作りで開催される予定だ。

河川敷緩傾斜部の上流端に架かる勘六橋の架け替えも、これまでの川での取組みが川以外のものに展開していこうとしている例だろう。老朽化した勘六橋を新しい橋に架け替える計画は以前から福岡県の事業として進められてきたが、昨年からは地域市民参加の場を設けて新しく架かる橋のデザインを川と一体的に考えていくことになった。橋にまつわる伝承が存在し市民が強い愛着を感じている現在の勘六橋のイメージをどう継承するのか、川辺の風景との調和についてどう考えるのかなどについて検討していく場となるだろう。そこではこれまでの川づくりには参加されなかった周辺の区長さんたちも出てこられる。川だけを対象としてきた取組みが、外側に向かって少し広がったとすることができる。

以前拙著の中で、「様々な立場や意見を持った人たちや組織が集まって、わがまちのわが川についてゆっくりじっくり話し合っこそ、川づくりがまちづくりとなっていく」と書いたことがあったが⁴⁾、現在の遠賀川はそうした段階にあるように思う。素晴らしい河川空間ができたことをきっかけに、今後はこれまで参加してこられた地域市民の輪をさらに広げ、河川事務所の皆さんも市役所の皆さんも市民の立場でそれに参加して、時間がかかってもいいから(川は無くならないので)、まちのなかにある皆のための川辺をどう地域のために活用していけばよいかを、試行錯誤をしながらゆっくりと考えてゆけばよい。もちろん筆者ら大学も及ばずながらそこに参加させていただきたい。遠賀川で次に何が出てくるのか、とても楽しみである。

参考図書

- 1) 「河川文化」河川文化を語る会講演集その26、社団法人日本河川協会、2008年
- 2) 賀川直方地区緩傾斜スロープ高水敷における来場者行動特性」、樋口明彦・田浦扶充子・高尾忠志・佐藤直之・岡本良平、土木学会景観・デザイン研究論文集 no. 3 (平成19年12月)
- 3) 「大地の川」、関正和、草思社、1995年
- 4) 「川づくりをまちづくりに」、樋口明彦十川からのまちづくり研究会、学芸出版社、2003年